日本CLIL教育学会(J-CLIL)
久留米市教育委員会
NPO法人CLIL教員研修研究所(CLIL-ite) 共催

CLIL Workshop at Kyomachi primary school

CLILで考える自然な小学校英語学習のあり方

会場　久留米市立京町小学校（福岡県久留米市京町２５６）
日時　令和５(2023)年１２月７日（木）　１１時～１７時

Reflection on the Workshop by Sasajima
笹島によるワークショップふりかえり

数日前に夕方にウオーキングをして暗がり車止めに躓き勢い余ってコンクリートの地面に顔面を痛打し救急で病院に行く事故にあった。キャンセルしなければいけないと諦めていたが、なんとか１２月７日（木）に久留米市京町小学校にたどり着いた。到着してホッとしたとともに、子どもたちがいる校庭や校舎の様子に目が行った。「いい学校だ」とすぐに感じた。世界のあちらこちらの学校を訪ねて早２０年以上が過ぎ、学校や生徒に接した瞬間に、不思議なもので、直感でほぼ学習活動などの雰囲気が大体わかるようになった。今日は楽しいワークショップになりそうだとそのとき感じた。

学校の入り口で柏木先生に会い、校長室に伺い、小西校長、久留米市教育委員会の新谷先生、高部先生、久留米市教育センターの福島先生と会い、会場に向かった。初対面で酷い顔でお目に掛からなければいけないのは申し訳なかったが、次第に気にもならなくたり、開会となった。

開会後の本日のメインイベントである授業公開は、３クラス同時展開でいずれもCLIL アプローチとして展開された。公開された授業は下記のとおりだ。

- 3 年 1 組 理科「電流」　授業者：小寺文子、Seth Mberego
- 2 年 2 組 算数「分数」　授業者：本村碧奈子
- 4 年 1 組 算数「小数のかけ算と割り算」　授業者：森田潤一、Kristen Ton

これは「すごい！」ことだと思う。１学年２クラスの小学校でこれができてしまう京町小学校の秘密は何だろうと思い、私は、4 年 1 組の算数の授業を参観させてもらった。クラスに入った瞬間、子どもたちは少し緊張しているようだったが、ひどい顔で「こんにちは」と言うと、表情が和らぎ、いいクラスだと思った。４年１組の授業は、数の数え方(counting numbers)の Warmup から始まった。自然にアメリカと日本の違いを入れな

がら英語を中心に授業が進んでいく。本日がこのクラスで初の授業となる Kristen Ton 先生が、森田先生と楽しそうにやりとりをしているのが印象的だった。思ったとおり「いい雰囲気だ」と素直に感じた。本授業の目標は「小数の割り算(dividing decimals)」で「割り切れない(indivisible)」場合の学習だ。「四捨五入」は英語でなんと言うのかは私も知らなかったが、rounding で、「四捨」は round down で、「五入」は round up というのだそうだ。子どもたちにとってはたいしたことではなく、素直にそれを受け入れているようだ。これこそ CLIL だと実感する。英語と日本語が交差(translanguaging)しながら授業が進み、思考が限りなく広がっている様子が、子どもたちの活動から見てとれる。学びの多い授業で、考えるさせられることが多かった。

その後、昼休みとなり、昼食は小学校１年生のクラスで食べた。給食の時間には校長先生の英語の生放送があり、子どもたちも楽しみにしているようだ。今日の放送は世界の場所の話題だった。放送の中の「Where do you want to go?」という質問を、１年生の子どもたちに質問した。多くが外国の都市の名前を言う中で、1 人の女の子が「Osaka」と言った。外国も日本も関係ない。「なるほど」と思った。まさに意味のやりとり(negotiation of meaning)のおもしろさがここにあると実感した。給食は美味しく、食べながらおしゃべりした。コロナの中では禁止されていたことがこうしてできるのはなんと幸せだろうと、先日転んでできた頭と顔の傷も忘れて楽しく会話した。「その顔どうしたの？」と心配されたり、給食の片付けを教えてくれたり、小学校１年生は「すごい！」と学び直した次第だ。

午後は、ワークショップのテーマである「CLIL で考える自然な小学校英語学習のあり方」について話し、そのまま「small talk を考える」ワークショップに進んだ。Small talk はそのまま「ちょっとした話」であるが、英語教育では授業の中の一つ活動として位置づけられているようだ。多くは teacher talk として授業の中の PPP の presentation にあたる役割と考えられることが多い。しかし、私個人としては、もっと自然に英語を使う場面を演出することが大切と考え、自然に英語と日本語でやりとりする small talk が CLIL に相応しいと考えて、提案してみた。

するとすぐ、京町小学校の先生がたは「すごい！」と実感した。それとともに、秘密がわかった。私の無茶ぶりにもかかわらず、楽しみながらそれぞれの small talk を披露してくれた。うまく説明できないが、ヨーロッパで CLIL を推進しているいくつかの学校を訪問した際に出会った教師のことを思い出した。要するに、彼らのほとんどが授

業を楽しんでいて、単に「やらせられている」ということではなく、「（自分が）やる」という気持ちがあり、仲間がいるということで、それがさらに相乗効果を産んでいる。CLIL を実践するというような気負いがなく、CLIL の理念を理解し、子どもにとってよかれと思うことを自然にやっている。これが秘密の一つだと思った。

京町小学校の CLIL は前校長の新谷先生が CLIL を推進したそうだ。それが現在の小西校長に受け継がれているようだ。中島先生や Seth 先生がその方向性をうまくコーディネートしているのだろう。このあたりは新谷先生に経緯を一度じっくりと伺ってみたい。CLIL を推進する大きな秘密がそこにありそうだ。キーパーソンは絶対に必要であるが、それとともにそのコミュニティがどのように作用したのかがカギだと思う。

久留米市教育委員会は現在の英語教育＋CLIL を推進していると理解している。ぜひこのままうまく CLIL が久留米市全体で浸透することを願う。NPO 法人 CLIL 教員研修研究所(CLIL-ite)は、日本 CLIL 教育学会(J-CLIL)とともに応援していきたい。望むべくは、久留米市教育委員会と持続的に CLIL 教育の普及と開発を共同できればと願っている。小学校の英語教育やそれに続く中学校の英語教育も決してうまくいっていない。公立の教育をもっと充実する必要がある。あれもこれもは、結局ふつうになってしまう。子どもたちの未来は子どもたち自身が切り開くことだと思う。ちょっとの間であるが、京町小学校の生徒に可能性を感じる。

CLIL は、決して特別なカリキュラムではない。また、特別な指導法でもない。日本の文脈で言えば教科横断型の指導の一環でしかない統合学習だが、そこに英語という言語を取り入れることに特徴がある。さらには、英語だけではなくその他の言語や文化を少しずつ自律的に取り入れる可能性を含める。京町小学校の実践はその考えに沿ったものだ。肩に力が入らない自然体の学習を学校全体で指導しているのではないかと期待している。無理をせず CLIL を自然な発想から工夫して、ともに学ぶことを大切にしてほしい。

本当にいい時間を過ごせた。感謝です。大阪女学院大学で Seth 先生と出会い、九州大学では、京町小学校の寺﨑先生、林田先生が参加し、京町小学校でのワークショップの開催を決め、こうして実施できたことはうれしい限りだ。ワークショップを受け入れてくれた京町小学校の多くの教職員の方に感謝申し上げる。

—笹島茂のふりかえり　2023.12.11

sasajimaclilite@gmail.com